

再起へ トレーラーホテル

被災地初 女川で開業

東日本大震災で大きな被害が出た宮城県女川町で27日、被災地初のトレーラーハウス型の宿泊施設が開業する。建築制限が多い被災地でも設置しやすいことから採用した。先頭に立ったのは、津波で旅館も両親も失った女将だ。工事関係者や年末年始に家族を訪ねる人たちを笑顔で迎える。

パステルカラーの施設がひときわ目立つ。スペイン語で灯台を意味する「El faro(エル・ファロ)」。復興の道を照らす存在になりたいとの思いを込め名付けた。64室あり140人が宿泊可能だ。

開業の中心になったのが震災前に町で旅館を営んでいた佐々木里子さん(44)。旅館は津波に流され、父は死亡、母は行方不明のままだ。昨年の夏前、常連客らから励ましのメールが届き始めた。「私にはお客さんがいる。両親が残してくれた財産だ」。旅館再開へ踏み出す気持ちになった。

町では宿泊施設も多くが被災し、残ったわずかな施

64室 女将「復興照らす存在に」



トレーラーハウス宿泊施設の開業が待ち遠しい佐々木里子さん＝宮城県女川町、日吉健吾撮影

設は満杯の状態。復興関連の業者は仙台などから最大3時間かけて通う。家族や親戚が仮設住宅で暮らす被災者を訪ねてきても、日帰りを余儀なくされていた。津波で浸水する恐れがあるため、町は多くの地域で建築物の増改築が制限されている。だが、「トレーラーハウス」なら自治体の承認があれば「設置」できる。今夏、メーカーで実物を見て佐々木さんは導入を決めた。「かわいくて一目

ぼれた」被災した町内の旅館3社と施設運営の組合を立ち上げ、理事長に就いた。総事業費は約5億円。国や宮城県から約3億円の支援を受け、残りを4社で分け合った。津波で被災した町営住宅の跡地を町から借り受け、開業にこぎ着けた。開業を前に徐々に予約も入り始めた。震災から1年9カ月の道のりを思うと涙がこみ上げる。「言葉にできないかも知れないが、満面の笑みで迎えたい」

(向井宏樹)

デジタル版に動画